

【研究ノート】

農村集落における精神的ムラ境の諸相

——茨城県桜村における虫送りと道切りを事例として——

小口千明

1. はじめに

最近、村境に関する議論、あるいは言及が増加してきている。村境とひとくちに言っても、実は、そのなかには少なくとも2種類の内容が含まれている。ひとつは、行政体の範囲を示す境界で、地形図上で一点鎖線などで表示されているものである。それに対し、村落の住民が日常生活や民俗行事を行う場合に、自分たちの生活領域と「よそ」とを区別する境界としての村境がある。この2種類の村境について、混同を避けるため、本稿では前者を行政的村境、後者を精神的ムラ境¹⁾とよぶことにする。

行政的境界、すなわち行政区画は、地理学の分野では主として政治地理学の重要な研究対象となってきた²⁾。日本における事例研究をみても、市町界や県郡界の問題と関連しながら、村境の改変³⁾や紛争経過⁴⁾などが論じられている。しかし、政治地理学では、行政界とはべつに存在する精神的ムラ境の問題にはほとんど関心が注がれなかった。精神的ムラ境に関する議論は、空間的な視点が不可欠な問題であるにもかかわらず、地理学よりはむしろ民俗学において提起された。それは、民俗学が「ムラとは何か」という議論を深化させてゆく過程において、必然的に登場したとあってよいであろう。人々が生活をくりひろげる空間におけるウチとソトという概念を、あるいはハレとケという概念を空間的に検討⁵⁾するうえで、ムラあるいはムラ境の問題は重要な意味をもってきたのである。

このような状況のなかで、近年、地理学からも精神的ムラ境が注目されるようになってきた。これは、地理学における相対的環境論の進展⁶⁾に伴うものである。すなわち、環境とは主体をとりまく諸条件の総和であり、したがって、環境という概念は、他方において「主体」という概念を想定しないと意味をなさない⁷⁾、という主張に要約される研究動向である。地理学の場合、主体とはひとまずは人間であり、研究上主体に配慮をするというのは、具体的には人間をすべて同質とみるのではなく、人間の異質性にも目を向けることを意味する。いま、人間の異質性のひとつとして価値観の異質性を想定すると、物理的には同一の状況が、人々によっては異なるように目に映ることが想定される。したがって、人々が認識している環境像が地理学の重要な研究対象となってくる。本稿で問題とする精神的ムラ境は、行政的には存在していないが、人々の認識像としては存在している例である。本稿は、茨城県新治郡桜村における虫送り行事などの民俗行事を指標として精神的ムラ境の実態を明らかにし、それを通して、人々が認識する村境像を探ろうとするものである。

2. 民俗行事と精神的ムラ境

虫送りは、農村集落において行われる行事である。一般に農作物、特に稲につく害虫を防ぐために行うと考えられている。集落（いわゆるムラ）単位に行われる場合がほとんどであり⁸⁾、行事の内容としては、集落内の人々が集まり、藁人形・松明・大数珠・鉦・太鼓などを持って行列をつくる。集落内の要所を巡回したあと、一定の地点で藁人形を焼いたり、念仏を唱えるなどして虫を追放したことにする、というのが標準的な方法である。かつては全国の比較的広範囲な地域でこの行事が行われていた形跡があり、伝承は各地に残っているが、現在なお行っている地域は少ない。例えば、埼玉県秩父郡皆野町立沢や同県越谷市北川崎では、現在も夏季に行われる⁹⁾。しかし、このような例の場合、虫を追放する目的というよりも、郷土芸能化してゆく傾向が認められる。

ところで、虫送り行事において、虫を追放しようとする行動がどのような地点で行われているかについて注目してみたい。この行事では、管見したどの報

告例によっても、世の中全体から虫を消滅させようというのではなく、自分のムラから虫を追い出そうとするのである。「追い出す」という行動をとるためには、ムラ境あるいはムラはずれとよばれる地点を強く意識することになる。ムラ境、ムラはずれともに本質的な意味は同様で、その地点から内側がムラであるということを表している。したがって、その地点から先は「外」あるいは「よそ」になる。このムラ境は、住民の意識のうえに存在しているだけであって、行政上の村境ではない。行政的には全く同一の地域内に存在する精神的な境界なのである。

農村集落においては、一般に虫送り行事以外にも、このような精神的ムラ境を示す指標が存在する。例えば、道祖神を祀る地点や、道切りという行事が行われる地点である。道祖神はサイノカミ（またはドウロクジンなど）ともよばれ、その信仰の基底が邪悪神の侵入を防止するところにあることは、つとに柳田国男によって指摘されている¹⁰⁾。サイ（漢字では「塞」の字を当てる）とは塞（ふさ）ぐことを意味するのである。

道切りは、災いや悪病がムラの中に侵入することを防ぐために、集落内の入口付近の道路上に注連縄を張る行事である。道祖神と主旨は同一であるが、道祖神が石像であることが多いのに対し、道切りは道路の両脇に棹を立てて縄を張るだけであるから、恒久的な施設ではない。一般的には、特定の時期や祭礼時に設置する。このように、道祖神も道切りも、ともにムラへの邪悪の侵入を防ごうとする意図があり、したがってそれらの位置は、虫送りと同様、ムラ境あるいはムラはずれが選ばれることになる。道祖神が祀られ、あるいは道切りが行われる地点から内側が、住民が守らねばならないムラの領域というわけである。

このほかにも、精神的ムラ境を示すと考えられる民俗行事が存在している。愛媛県南宇和郡内海村の例であるが、ムラはずれに大わらじを置く¹¹⁾。他の地域にも同様の行事がある。いずれも疫病除けのために行われるものであり、道祖神にわらじを奉納する習俗との関連が想起されるように、道祖神や道切りと同趣旨の民俗といえよう。また、本稿で後に事例を紹介する茨城県新治郡桜村

では、犬や猫の死骸を三叉路に埋葬する習俗がある。この習俗の場合、埋葬の地点が三叉路ならどこでもよいというのではなく、集落内の人家の集合部分と耕地（いわゆるノラ）との中間にあたるムラはずれの地点が選ばれる。この習俗は犬供養とよばれ、女性が安産を祈願する趣旨のものであるが、精神的ムラ境を示す指標とみることも可能である¹²⁾。

以上、村境には行政的村境のほかに精神的ムラ境が存在することを紹介した。また、精神的ムラ境はどのような指標によってその存在が示されるのか、ということも示した。では、上述した精神的ムラ境は、選ぶ指標によってそれぞれ異なる輪郭を示すのであろうか。それとも、指標をいずれにとっても、一本に収斂されるのであろうか。この問題を考えてゆきたい。

3. 各地の虫送り行事とムラ境についての関心

日本全体をみると、虫送りは特に東北地方北部と西日本一帯で盛んであった、とされる¹³⁾。しかし、関東・中部地方にも多くの分布がみられ¹⁴⁾、分布に濃淡はあってもほぼ日本全国に存在したとみてよいであろう。各地の民俗誌からは、さまざまな地域における虫送り行事の内容を知ることができる。若干の例を挙げておく。

茨城県勝田市では、旧6月1日ごろ、若者達が藁で虫の形を作り、荷車につけ、夜提灯をかざしてその荷車を先頭に村内を練り歩き、最後にオオムラザカイ（部落境）に捨てて逃げるならわしであった¹⁵⁾。同県新治郡八郷町では、若者達が日中、病害のある稲の茎を少し採って川に流した¹⁶⁾。千葉県手賀沼付近では、婦人達が鉦や太鼓をならしながら、村境から村境まで歩く¹⁷⁾。富山県西砺波郡福光町では同様の趣旨の行事をネツオクリとよび、青竹や幟を立てた紙張子の舟をかついで集落内を一巡し、最後は小矢部川に流す¹⁸⁾。愛媛県周桑郡小松町では、寺に集まって大数珠を繰った後、少年達が鉦をたたきながら田の畦を一巡する¹⁹⁾。

このほかにも、膨大な数の事例が報告されている。しかし、ここでは行事内容の細部の異同をみてゆく視点とは異なり、行事と村境（またはムラ境）の関

係のみに注目する。ここに紹介した虫送り行事の例をみると、巡回地点あるいはしめくくりが村境（またはムラ境）に属するものと、川に流すものと、二分することができる。それらのうち、村境（またはムラ境）となる方の例に注目してみると、説明文に用いられている「村境」が、行政的村境・精神的ムラ境のどちらであるのか判断が難しい。特に精神的ムラ境の位置や輪郭を検討しようとする場合には、より困難となる。これは民俗学的な関心と地理学的関心とのちがいによるものであって、調査の精度のことを述べているわけではない。しかし、本稿の目的に沿う限り、虫送りに関する民俗学的資料の蓄積が十分に活用できないことになる。同様のことは、道切りなど他の資料についてもいうことができる。結局、本稿では茨城県新治郡桜村を事例として虫送りと道切りに関する実地調査をし、この両指標によって得られる精神的ムラ境を比較検討することにした。

4. 桜村における虫送りと道切りの実態

研究対象地域として茨城県新治郡桜村北部の栗原地区（集落名は、乾島・中坪・下坪・上野）を選んだのは、

- ①この地域は集落形態が典型的な集村であり、精神的ムラ境の輪郭が比較的シンプルな形で得られると予想されたこと。
- ②稲作が生業の基盤となっており、過去において虫送りの行事が存在していたこと。
- ③道切りが現在も行われていること。

などの理由による。図1に研究対象地域およびその周辺の昭和初期の状況²⁰⁾を示した。図の中で栗原村と表示されている地域が、現在の桜村大字栗原である。そして、現地の各集落における観察・ききとり調査の結果を図2～図4に示した（図の中で黒く示した家屋は、後に述べる虫送り行事の消滅期にあたる昭和10年代に存在していたことを示す）。

さて、この地域では、虫送り行事をムシオイとよぶことが多かった。各集落とも、現在は虫送りを行っていない。消滅した時期は集落によって若干異な

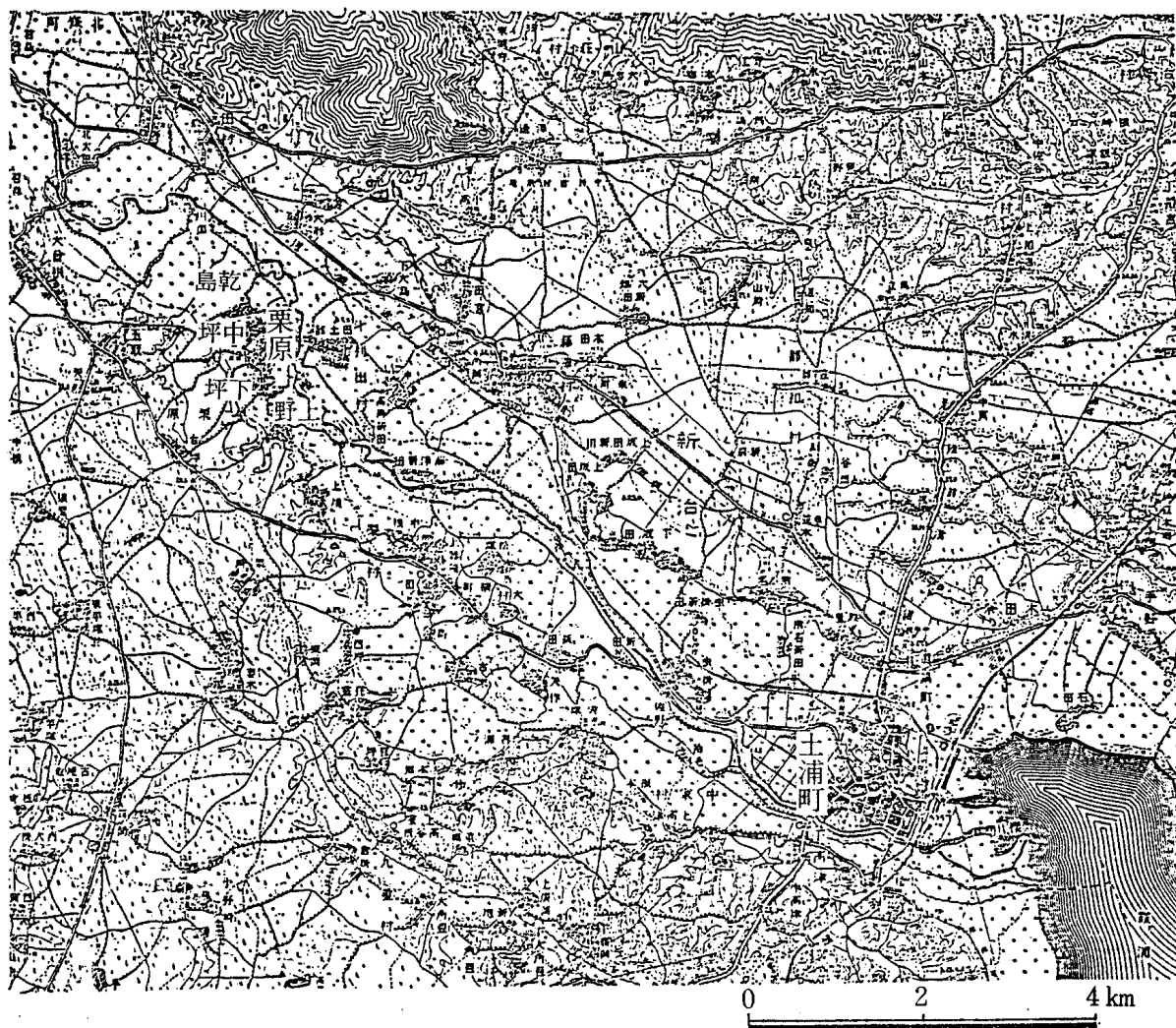


図 1 研究対象地域

注) 文字は右書きである。

出典) 内務省地理調査所編集・発行(1905測図, 1929修正)五万分の一地形図「土浦」

り、上野地区では昭和に入るところにはすでに消滅していたと判断されるのに対し、下坪地区では昭和10年代には行われていた。これは、そもそも各集落内での行事内容が他の集落と連携、あるいは競合していなかったということがらとともに、各集落が独自に虫送りの行事を運営してきたことを示すものである。

次に、各集落に共通する虫送り(ムシオイ)の行事内容や特徴を記しておく。

- ①夏の土用の入りから3日めの日(この日をドヨウサブロウとよぶ)に行う。
- ②夜になって行うのではなく、午前中に開始し、午前のうち、または午後の早い時刻までに終了する。

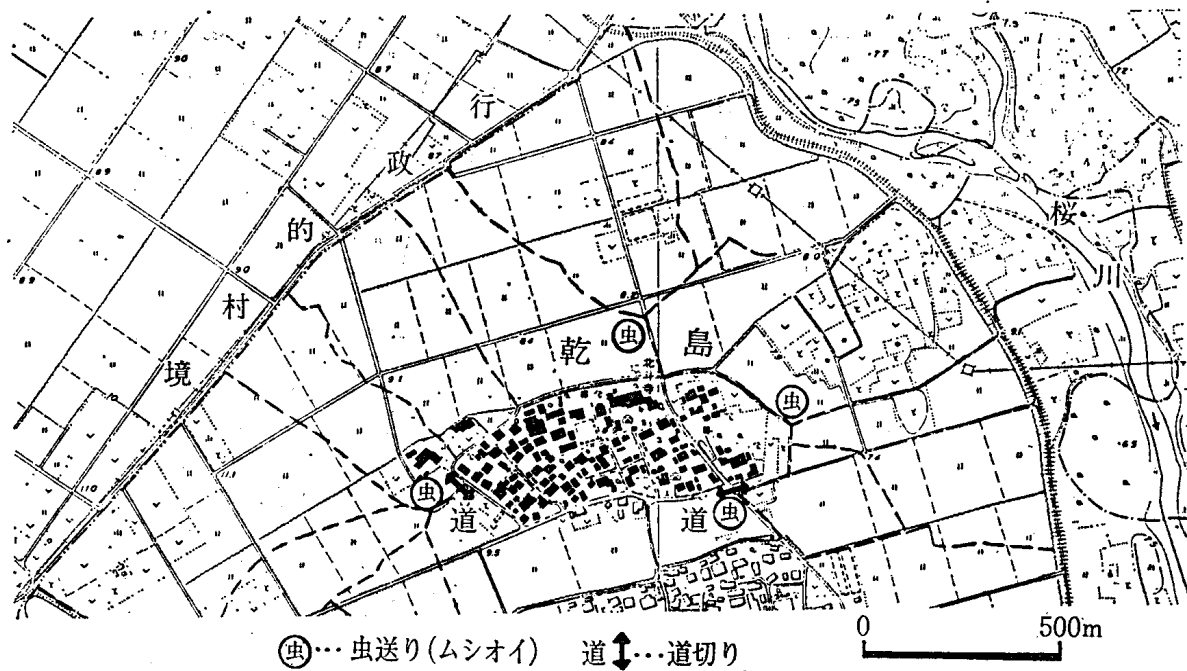


図2 桜村乾島における虫送り（ムシオイ）と道切り

③当日は、集落内の各家の人々が一但オコヤとよばれる寄合所集まる。その後、一同で行列をつくって、古くから決められている数か所の地点（図2～図4において⊕印で表示した地点）を巡り、寄合所に戻ってきて終わる。耕地（いわゆるノラ）だけでなく、人家の部分も巡回する。

④行列の先導は、集落内のハウガンさんとよばれる役の人が行う。行列構成員の主要な携行品は、鉦・太鼓および直径1メートルを越える大数珠である。藁人形の類は作製しない。

⑤行列は上記の特定の地点に到着すると数人で大数珠を持って輪になり、回しながら「ナンマイダンボ、ジュズクリダンボ」という念仏を繰り返し唱える。この地点で虫をムラから追い出すわけであり、そこはムラ境あるいはムラはずれとして意識される。

⑥念仏を唱えながら大数珠を回転させる地点は各集落に2～4か所あるが、これらの地点を巡回する順番が決められている。行列が集落を一巡する場合、テントウマワリといって、太陽の動きになぞらえて回る。すなわち、まず集落の東方から出発し、続いて南方、西方、北方と右回りに回って出発点

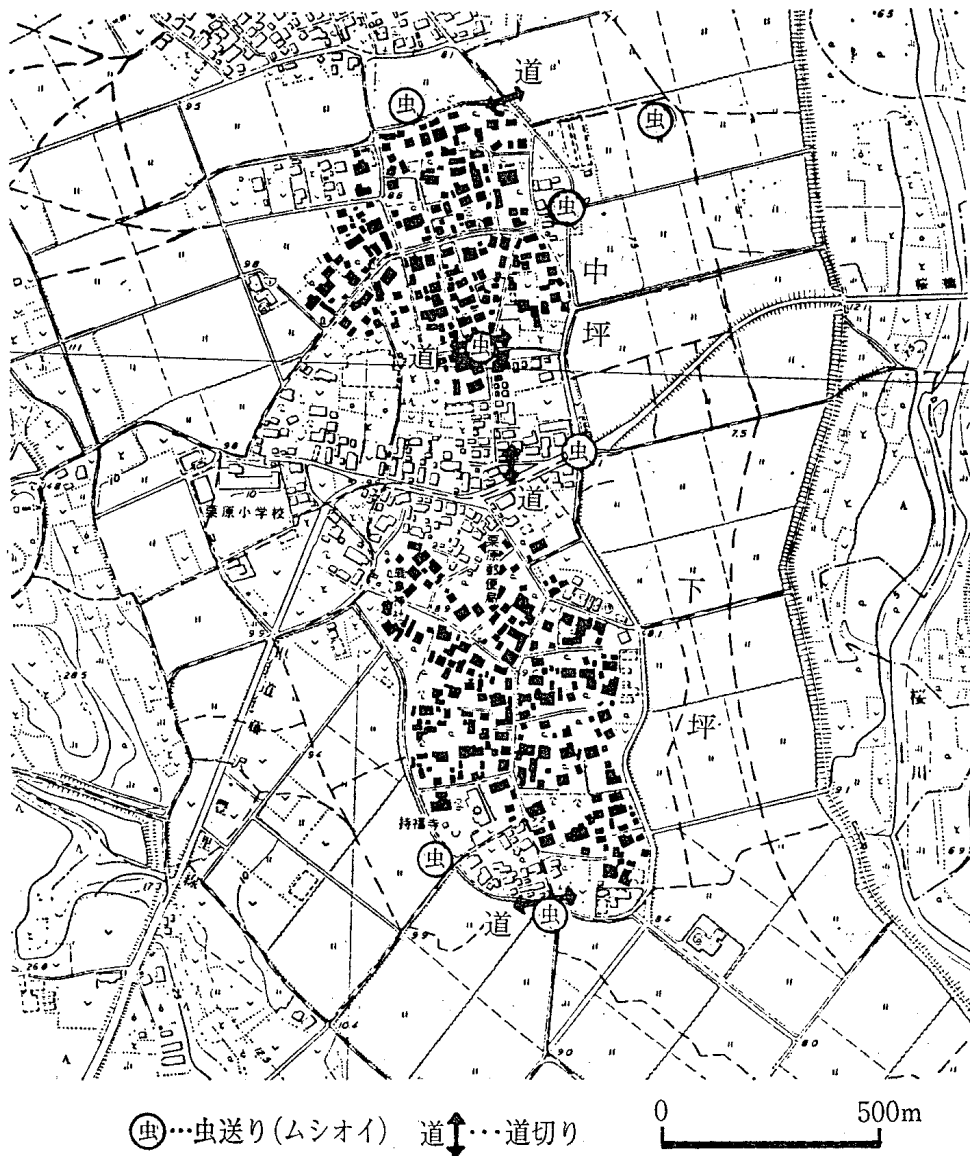


図3 桜村中坪・下坪における虫送り（ムシオイ）と道切り

に戻る²¹⁾。

⑦大数珠を回転させる地点は、道路が交差していわゆる「辻」になっているところである。

いっぽう、道切りはいずれの集落でも現在なお行われている。行事内容は各集落とも共通していて、夏の祇園祭の際に道路を跨ぐように2本の竹を立て、その間に注連縄を張るものである。道切りのために竹を立て、注連を張る地点は、各集落とも2か所である(図2~図4)。この2か所はムラの入口であり、そこから内側への邪悪の侵入を防ぐ。すなわち、道切りの注連縄から内側

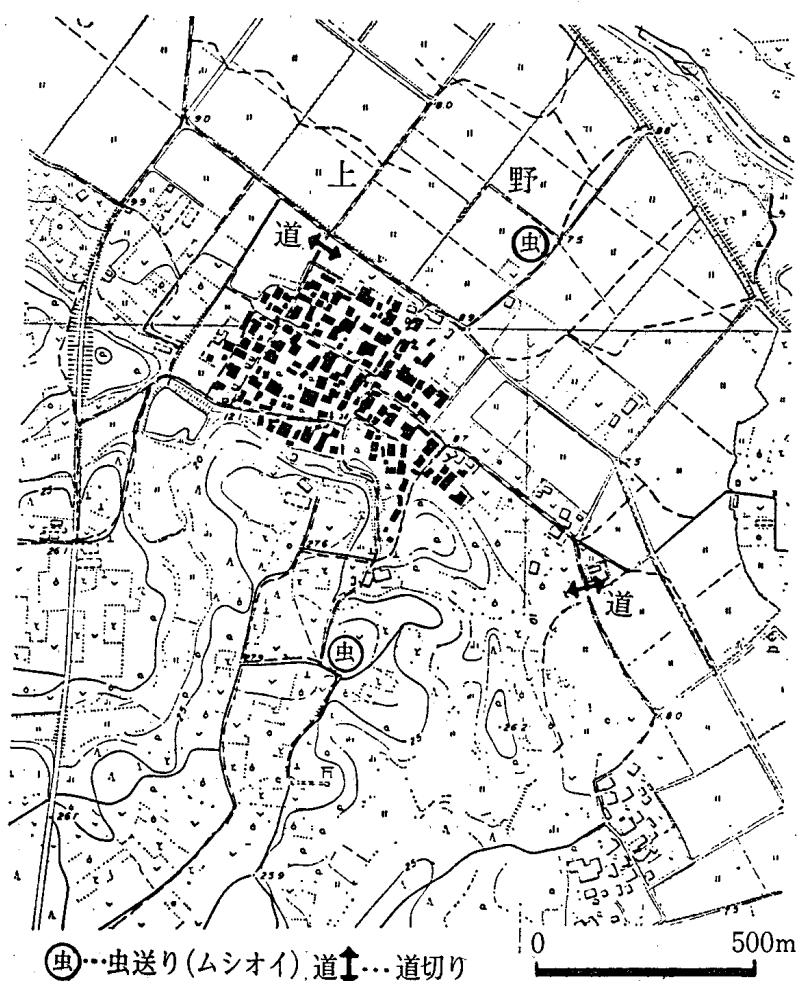


図4 桜村上野における虫送り（ムシオイ）と道切り

がムラであり、注連縄を張った地点もまたムラ境あるいはムラはずれということになる。なお、道祖神は研究対象集落のなかでは中坪地区に1基が存在するのみである。これは虫送りや道切りとは異なり、各集落に必ず備わっているものではないようである。したがって、本稿においてはいずれの集落においても対比、検討が可能な虫送りと道切りについて考察を進め、道祖神については考察の対象から省くことにした。

5. 虫送りが示すムラ境と道切りが示すムラ境

このように桜村北部の例をみても、虫送りと道切りのいずれもが邪悪からムラを防御するために、行事の遂行はムラ境の地点を強く意識したものであった。また、どちらの行事も集落における公的な催しであり、この行事で示さ

れたムラ境は一部の人々の個人的な解釈によるものではなく、集落の人々の総意であるという点が重要である。

さて、虫送りによって示されるムラ境と道切りによって示されるムラ境とを比較してみたい。各集落の状況を表示した図2～図4をみると、従来、民俗誌などで単に「ムラ境で行われる」と一括される傾向にあったこれらの行事が行われる地点が、空間的に必ずしも一致していないことが指摘できる。乾島地区の南方や下坪地区の南方などのように、双方の行事によって示されるムラ境が一致している例も存在している。しかし、いずれの集落にも、双方のムラ境が異なる地点を示す場合を含んでいることは見落とせない。

さらに、それらの地点をよくみてゆくと、虫送りの示すムラ境と道切りの示すムラ境が異なる場合、虫送りの示すムラ境の方が道切りの示すムラ境よりも、集落の中心部から離れた外側の地点に位置することがわかる。いま、これらの行事によって示された地点群から集落の住民が認識している精神的ムラ境を知ろうとする時、このムラ境は行政的村境のように連続する線によって区画された境界ではなく、集落から延びる道路上にあるいくつかの点を結んでできる空間であるということになる。これは、精神的ムラ境は象徴的な存在であって、四方を線で囲まらずに示されるものであるという鳥越皓之の主張²²⁾に依拠している。

ところで、虫送りで意識されたムラ境を示す諸地点は、いずれも道路の交差点である。このことは、集落内の「岐(ちまた)」が一種の広場として社会的・精神的に重要な位置を占めているという原田敏明の指摘²³⁾をふまえて考える必要がある。すなわち、道切りの行われる地点は交差点であることを必要としないという点で、虫送りとは異なる思想に基づくムラ境であることを想起させる。したがって、虫送りによって示された地点と、道切りによって示された地点とをすべて結んだ円周を想定して、それをある集落の精神的ムラ境と規定することは正しくない。むしろ、両者の地点は、何らかの意味が異なる2種類のムラ境を示していると考えることが適当である。したがって、集落をとり囲むムラ境は、本稿で示した事例からみると、一重ではなく、二重に存在するとい

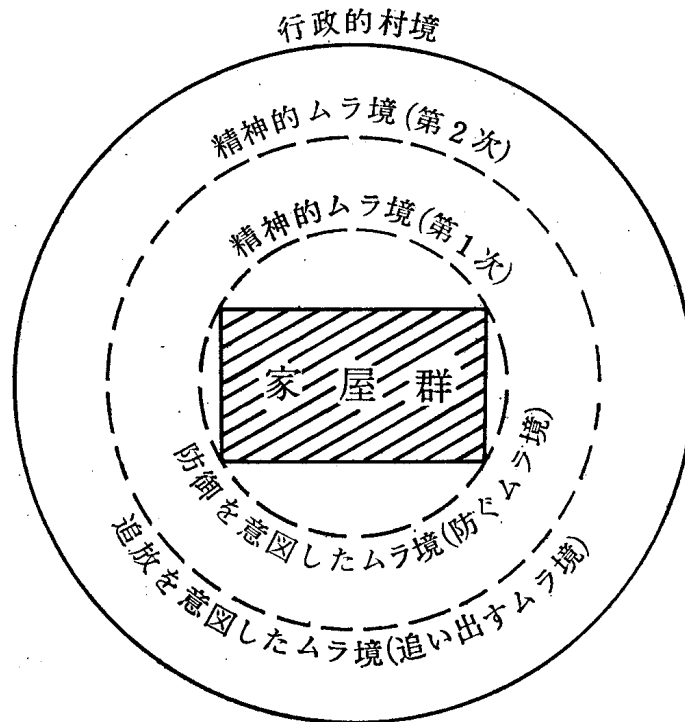


図5 村境の構造(模式図)
——茨城県桜村の事例から——

える。つまり、図5に模式的に示したように、集落内の人家の集合部分を取り囲む位置にいわば第1次のムラ境があり、その外周にはいわば第2次のムラ境があるということになる。行政上の村境は、さらにその外周に存在するわけである。

ところで、精神的ムラ境の二重構造の意味を考えるうえで、虫送り行事に関して一般にいわれている意味づけを若干吟味してみる必要があるように思う。通常、虫送りは、作物の害虫、とりわけ稲の害虫を除けるために行う行事であって、かつて科学的な駆除法を知らなかった時代には、人々はこの行事の効力を信じていた、とされる。また、農薬による害虫駆除が導入されたことによって、各地の虫送り行事が意義を失い、消滅していったともいわれる。

確かにこの行事の説明は、広く各地でこのようになされているし、また、歴史的にみても大虫害の発生によって、この行事の内容が整えられていったようである²⁴⁾。しかし、桜村北部の事例からみると、水田だけを巡回するのではなく集落内の家々も巡回の対象となっており、家々の前でも念仏が唱えられる。

これは、虫送りの対象となるムシは稲につく害虫(図6)という具体的な虫に加えて、人間に宿って病気を引き起こす「癩の虫」などの抽象的なムシが含まれている可能性がある。また、この行事が盛んだったころの人々は行事の効力を信じていたといわれるが、農薬が普及する以前、18世紀前半から、すでに鯨油・種油、後には石油を用いた、水田の害虫駆除法が開発され、普及している²⁶⁾。また、田植えの時期を工夫する²⁷⁾ことによって虫害を防ぐ場合もあるなど、直接的な効果を求める動きも認められる。そのほか、ある集落で虫送りを行って虫を追い出したとされる時、隣接する集落から虫の追放に対する反論が出る例もみられないし、図6に示す昆虫によって稲が害される危険性は、栽培期間中に複数回あるにもかかわらず、虫送りは夏に1回行われるだけである。これらの状況は、虫送りが直接的な効果をねらったものではなく、象徴的な意

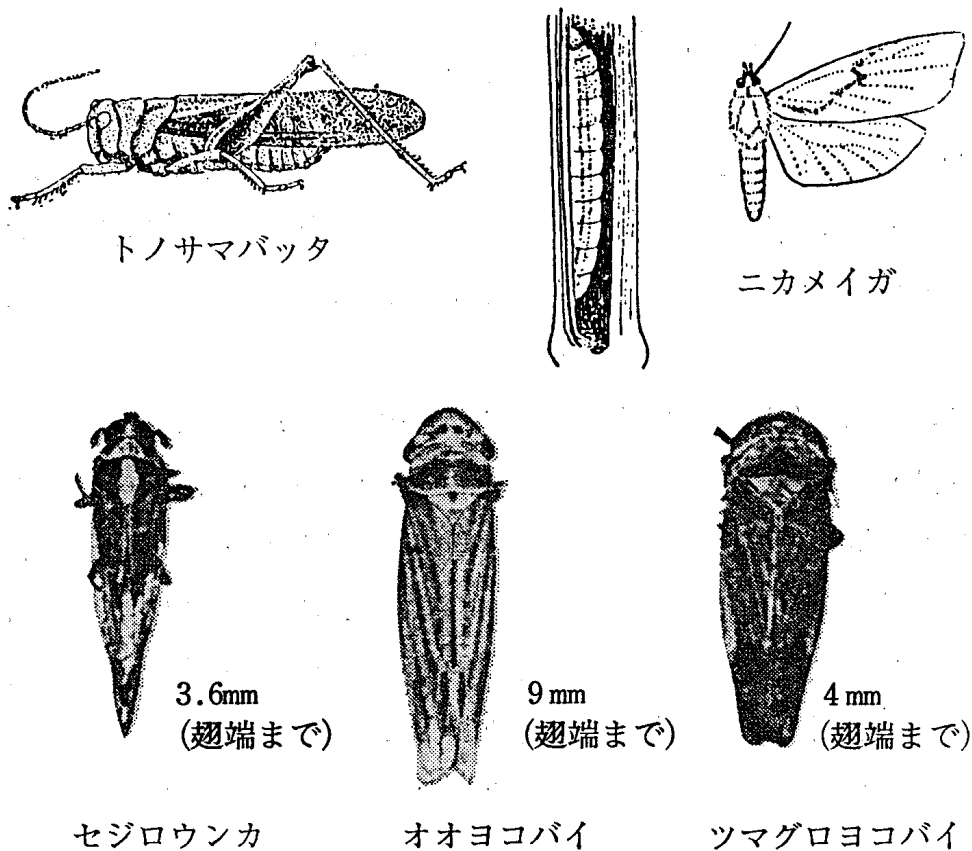


図6 主要な稲の害虫

出典) 古川晴男監修『昆虫の事典』および伊藤修四郎ほか編『原色日本昆虫図鑑(下)』

味あいから行われていたことがわかる。行事の消滅過程については、一般にいわれるように農薬の普及も関連しているであろう。しかし、実際には、最も初期の農薬である有機リン系のパラチオンが導入された昭和26年²⁸⁾以前に、桜村の場合はすでに消滅している。その原因は明確ではないが、戦争の影響も無視できないものと思われる。

結局、虫送りは呪術による象徴的な行動であって、直接的に実効を求めた行事ではなかった。また、その意味内容は、田の虫に加えて人間に宿るムシをも含めた邪悪の追放であったと考えられる。このことは、ムラ境との関連でいえば、さきに述べた第2次のムラ境(図5)は、決して田に近い場所で田の虫だけを追放しようという実効を期待したものではなく、人間に宿るムシをも含む邪悪を総合的に追放する象徴的な行動のための地点群とみなす必要があることを意味している。このようにみてゆけば、二重にある精神的ムラ境のうち、第1次の境界は邪悪からムラを防御するためのムラ境を意味し、第2次の境界は、邪悪をムラの外へ追放するためのムラ境であると考えることができる。いわば「防ぐムラ境」と「追い出すムラ境」ということになる。したがって、自分達の居住する世界という意味でのムラの範囲を人々が認識する時、防御を念頭におく場合と追放を念頭におく場合とで、その領域が異なることになる。人々が抱いている精神的ムラ境の認識像は、決して固定され、変わることはない一定の範囲ではなく、状況に応じて変化する相対的な存在だったのである。

6. ま と め

本稿の目的は、茨城県桜村北部の農村集落を事例として、人々が認識しているムラ境とはどのようなものかを具体的に明らかにすることにあつた。それは、同時に、地理学における相対的環境論に基づく、環境に対する人々の認識像の究明を意図するものであつた。

具体的には、虫送り(ムシオイ)と道切りという2つの異なる民俗行事によって、集落に居住する人々がムラ境をどのように認識しているかを検討した。その結果、図5に模式的に表したように、人家の集合を中心に、第1次、第2

次という二重の精神的ムラ境が存在し、その外周に行政的村境が存在する構造であることが示された。特に、それらの2つの異なる精神的ムラ境を解釈すれば、第1次は防御を意図したムラ境、第2次は追放を意図したムラ境ということが出来る。したがって、集落に居住する人々が認識している精神的ムラ境は、防御を念頭におく場合と追放を念頭におく場合とで、その領域が異なることが明らかになった。結局、ムラ境を例にして、環境に対する認識像が状況に応じて相対的であることが確認されたといえる。

しかしながら、残された課題も多い。おもな点を挙げると、まず、道祖神やわらじによる邪悪封じ、あるいは鳥追いなど、他の民俗行事を指標にした場合の検討が不可欠である。それらの民俗が本稿で示した精神的ムラ境の構造とどのように関わっているのかを、今後、より詳細に検討してゆく必要がある。もうひとつは、他地域の事例との比較が重要である。虫送り行事だけをとりても、地域的に行事内容の差異が顕著である。そのこととムラ境の構造とは関連があるのかという点についても検討を行わねばならないであろう。これらの課題については、今後さらに検討を続けてゆきたいと思う。

〔注および文献〕

- 1) このほか、社会的境界と名づける例もある。例えば、鳥越皓之(1976) 部落・町内の境界(序)——地域集団にみる内と外の観念——, ソシオロジ21—2, pp. 61—62. など。しかし、行政的村境も社会的境界の一種とみなすことができると考え、本稿ではこの語を用いなかった。
- 2) ジャクソン・横山昭市(1979)『政治地理学』, 大明堂, pp. 28—34.
- 3) 例えば、佐々木清治(1975) 明治前期における地方行政区画の変遷, 歴史地理学紀要17, pp. 127—137. など。
- 4) 例えば、林正巳(1980)『峠の民俗地誌——境をめぐる——』, 古今書院, pp. 149—154. など。
- 5) 例えば、桜田勝徳(1958)「村とは何か」, 『日本民俗学大系3』, 平凡社, pp. 29—37. 所収など。
- 6) 菊地利夫(1977)『歴史地理学方法論』, 大明堂, pp. 25—31. に詳しい議論がある。
- 7) 川喜田二郎(1982) 環境科学はこれでよいのか, 筑波大学環境科学研究科年報5, p. 93.
- 8) まれに隣接する集落と打合わせて行われる例もある。福田アジオ(1982)『日本

- 村落の民俗的構造』, 弘文堂, p. 50.
- 9) 両地区の行事内容については, 国土地理協会編 (1981)『埼玉のまつり』, 埼玉県民文化課, pp. 92—95. および pp. 120—123. に紹介がある。
 - 10) 柳田国男 (1910初版, 1963復刻)「石神問答」, 『定本柳田国男集12』, 筑摩書房, p. 135. 所収
 - 11) 北見俊夫・西垣晴次 (1961)「村のしくみ」, 和歌森太郎編『宇和地帯の民俗』, 吉川弘文館, pp. 106—107. 所収
 - 12) 小口千明 (1981) 廃棄物からみた地域住民の行動特性——廃棄物の地理学的研究序説——, 史境 2, pp. 105—106.
 - 13) 神野善治 (1978)「人形送り」, 大島建彦編『講座日本の民俗 6 年中行事』, 有精堂, p. 104. 所収
 - 14) 前掲13) p. 106.
 - 15) 都丸九一ほか著 (1980)『関東の生業 1 農林業』, 明玄書房, p. 145.
 - 16) 日向野徳久ほか著 (1973)『関東の民間信仰』, 明玄書房, p. 114.
 - 17) 前掲16) p. 373.
 - 18) 石崎直義 (1965) 北陸に残る「虫送り」習俗考, 日本民俗学会報 38, pp. 18—20.
 - 19) 森正史 (1960) 愛媛県の虫送り, 日本民俗学会報12, p. 36.
 - 20) この地域で虫送り (ムシオイ) が行われていた時期の状況を示すことが適当であると考えたからである。
 - 21) このような巡回の方向は他の地域でもみられ, 巡回路の基本的パターンになっているものと思われる。千葉県海上郡の例が, 松崎憲三 (1983) 村落の空間論的把握に関する事例研究——千葉県海上郡倉橋を試例として——, 国立歴史民俗博物館研究報告 2, pp. 34—35. に紹介されている。
 - 22) 前掲 1) pp. 61—62.
 - 23) 原田敏明 (1957) 村の境, 社会と伝承 4, pp. 20—21.
 - 24) 宮田登 (1972)「むしおくり」, 大塚民俗学会編『日本民俗事典』, 弘文堂, p. 720. 所収
 - 25) トノサマバッタ・ニカメイガ: 古川晴男監修 (1970)『昆虫の事典』, p. 229 および p. 288.
セジロウンカ・オオヨコバイ・ツマグロヨコバイ: 伊藤修四郎ほか編(1977)『原色日本昆虫図鑑(下)』, 図版36—37.
 - 26) 笹川満広 (1979)『虫の文化史』, 文一総合出版, pp. 119—132.
 - 27) 桜村では, 経験的に 6月20日～6月末日に田植えをすると虫がつきにくく, 6月10日～6月15日に田植えをすると虫がつきやすいといわれている。
 - 28) 前掲26) p. 130.